

東 洋 医 学

【単位数:0.5 単位, 授業 12 コマ, 予備3コマ(定期試験含まず)】

当該科目は医師としての臨床経験を持つ教員が担当する授業科目である。

1 科目責任者

早稲田勝久 教授(医学教育センター)

科目担当者

伊吹恵里 客員教授

2 教育目標

(1) ねらい (I-2-b, III-6-b, IV-1-b, IV-2-b, IV-9-b)

- ① コンピテンスの「プロフェッショナルリズム」を修得するために、東洋医学を通して、患者の多様な価値観を尊重し、全人的な対応を理解する。
- ② 「医学知識と科学的探究心」を修得するために、漢方医学の特徴や、主な和漢薬(漢方薬)の適応、薬理作用を概説できる。

(2) 学修目標

- ① 東洋医学と西洋医学の基本的相違点を概説できる。
- ② 東洋医学の特徴・基本的概念(陰陽・虚実, 表裏・寒熱, 気・血・水(津液)・五臓・六病位)について説明できる。
- ③ 東洋医学の診察法(四診—望診, 聞診, 問診, 切診)について説明できる。
- ④ 東洋医学における「証」とは何かを説明できる。
- ⑤ 「弁証論治」又は「随証治療」並びに「方証相對」について説明できる。
- ⑥ 代表的な漢方方剤の適応症及び構成生薬の薬理作用について概説できる。
- ⑦ 代表的な漢方処方剤の副作用や使用上の注意事項を説明できる。
- ⑧ 東洋医学のEBMと現代医療における東洋医学の役割について概説できる。
- ⑨ 経絡・経穴及び鍼灸治療の概略について説明できる。

3 成績の判定・評価

(1) 総合成績の対象と算出法

	成績対象	割合	方法・コメント
定期試験	○	80%	記述式と多肢選択問題を含む。
小テスト	○	20%	6月22日(月)及び6月29日(月)の講義終了後(実施する時間帯は講義中並びにAIDLE-K上に告知する)の計2回実施する。 指定された時間帯以外での回答の提出は認めない。
態度	○	—	態度不良の場合は、総合成績から10点を限度に減点をする。

出席: 定期試験を受験するためには欠席率が3分の1を超えてはならない。

(2) 合格基準

評価対象の合計が60%以上(又は60点以上)で合格とする。

(3) 再試験・再評価の方法

再試験は定期試験に準ずる方法で実施する(60%以上で合格)。

(4) 課題(試験やレポート)へのフィードバック

定期試験の成績についての総括を学内メールで実施する。理解が不十分な項目について再確認を促すとともに、定期試験で不合格となった者は再試験に備える。

4 教科書

書名	著者名	出版社	教科書として指定する理由
愛知医科大学東洋医学基礎理論基本用語解説集(配布資料)	東洋医学講義担当者		東洋医学全般の基本事項の理解に有用である。
東洋医学講義資料集(配布資料)	東洋医学講義担当者		講義内容の理解に必要(一部の内容は授業前に配付する)。
基本がわかる漢方医学講義	日本漢方医学教育協議会	羊土社	漢方医学に関する基礎事項が平易かつ簡潔に編集されている。

5 参考図書

書名	著者名	出版社	参考図書とする理由
医学生のための漢方医学【基礎編】	安井廣迪	東洋学術出版社	東洋医学全般の基本事項の理解に有用である。
絵で見る和漢診療学	寺澤捷年	医学書院	漢方医学に関する基礎事項が平易かつ簡潔に編集されている。
中医臨床のための舌診と脈診	神戸中医学研究会編	医歯薬出版株式会社	東洋医学における診察法と所見の解釈が詳しく編集されている。
鍼灸の医学	長浜喜夫	創元社	鍼灸に関する基本事項の理解に有用である。
三大法則で解き明かす漢方・中医入門	梁 哲成	療原書店	東洋医学全般の基礎理論を理解するのに有用である。

6 準備学習(予習・復習)

- 事前に配付された「愛知医科大学東洋医学基礎理論基本用語解説集」と「東洋医学講義資料集」を熟読し、東洋医学に関するイメージをつかんでおく(1日あたり約1時間)。
- 「基本がわかる漢方医学講義」を用いて東洋医学の基礎の理解に役立てる事を推奨する。
- 「愛知医科大学東洋医学基礎理論基本用語集」と「東洋医学講義資料集」を毎回授業の際に持参し、各授業内容理解のための参考書とする。
- 一部eラーニングを用いた予習を行う(予定)。

7 授業計画

(1) 講義の方法

基本的に大教室での実習型授業を中心に、部分的に知識伝達型講義もまじえて展開する。

その準備として、東洋医学に関する基本的知識は「愛知医科大学東洋医学基礎理論基本用語解説集」のほか「東洋医学講義資料集」、「基本がわかる漢方医学講義」並びに一部eラーニング(予定)で予習しておくことが必須である。

(2) 講義の内容

東洋医学の基本的な考え方とその診療法並びに西洋医学との相違点を理解し、将来医師になった際の診療で役立つ臨床能力として活用できるような内容にする。